

令和元年度 第1回富山県総合教育会議 議事録

1 日時 令和元年8月28日(水) 16:00～17:30

2 場所 県庁4階大会議室

3 出席者 富山県知事 石井 隆一

富山県教育委員会

教育長 伍嶋 二美男

委員 山崎 弘一

委員 町野 利道

委員 村上 美也子

委員 藤重 佳代子

委員 鳥海 清司

4 事務局出席者 総合政策局長 蔵堀 祐一

教育・スポーツ政策監 荒井 克博

理事・教育次長 布野 浩久

教育次長 坪池 宏

参事・企画調整室課長 朝倉 正

参事・県立学校課長 本江 孝一

小中学校課長 近藤 智久 他関係課職員等数名

5 議事

(1) 県立高校再編－開設準備について(校名等)

(2) 幼児教育の充実について

6 会議の要旨

司会が開会を宣し、石井知事の挨拶後、富山県総合教育会議運営要領第3条の規定により、以後の議事については知事が進行した。

(石井知事)

- ・協議事項「県立高校再編に係る開設準備について」は、昨年12月の総合教育会議で、県立高校再編の実施計画を取りまとめた。この実施計画に基づいて、この4月に設置された新高校4高校の開設準備室で現在、来年4月の新高校開設に向け、教育目標や教育方針、カリキュラムの作成等の準備作業に、鋭意、取り組んでいる。
- ・一方で、新高校や再編対象校の学習活動、部活動等の実施方法、新高校の名称、校歌、校章などについて、共通の課題が存在する。これまで開設準備検討会を設置して、3回にわたっての検討協議の結果、新

高校4校の開設準備に係る基本的な考え方を取りまとめていただいたので、これまでの経過や取りまとめられた「新高校4校の開設準備に係る基本的な考え方」について、事務局から説明を願う。

本江 参事・県立学校課長より、資料1～資料5-2に基づき、「県立高校再編一開設準備について（校名等）」について、説明した。

（石井知事）

- ・開設準備に係る共通課題について検討することとする。「新高校4校の開設準備に係る基本的考え方」も踏まえ、ご意見を伺いたい。
- ・その後、そのご意見を踏まえて新高校4校の校名案について、検討していきたいと思う。
- ・それでは高校再編に係る学習活動や学校行事、部活動等に関することについて、ご意見を伺う。

（町野委員）

- ・新高校の教育の充実のために、また、魅力アップのために再編対象となっている両校のそれぞれの良いところを新高校に引き継いでいくことは、非常に大切である。そのために、両校の歴史や伝統、生徒や保護者のニーズを踏まえて開設準備を進めることは、欠かせないと思う。そういう意味では、「基本的な考え方」にそれが盛り込まれているので、非常にいいのではないかと思う。

（鳥海委員）

- ・新高校の学習活動や部活動を充実していこうと考えた場合、施設設備や教員等の配置など教育環境の整備をしていくことが、とても大切になる。
- ・今回の再編に当たっては、再編対象校の特色ある部活動を新高校に引き継ぐことになっている。具体的にはアーチェリー、フェンシング、ライフル射撃などがあるわけだが、これらの種目は一般の設備では代替できないような特別な施設設備が必要となる。新高校にはこれらの特別な施設設備を整備して、教育環境を整備することが大切だと思われる。そして、「基本的な考え方」には、こうしたこともしっかり書かれていると思われる。

（村上委員）

- ・新高校が設置されない再編対象校では、移行期には年次推移で生徒数が段々と減少していくが、教員配置等によって学習活動はもちろんのこと、学校行事、部活動についても充実した高校生活が送れるように配慮していくことが必要であると思う。合同活動もその一つかと思う。

これは在校生が最後まで学校に誇りと自信を持って学校生活を送るためにとっても大事なことだと思うが、この「基本的な考え方」に、きちんと記載されている。

(藤重委員)

- ・パンフレットやホームページなどで、新高校についての情報発信や開設準備室から中学校へ出向いての説明は、中学生の適切な進路選択にとって大切だと思う。こうしたことも「基本的な考え方」にしっかりと書かれており良いと思う。
- ・情報発信という点では、新高校の概要リーフレットが、いち早くこの夏のオープンハイスクールで活用されているのは、大変、良いことだと思う。

(伍嶋教育長)

- ・再編に当たっては、前期の再編と同様に「高校教育の充実につながった」と思っていたできるように、新高校では、学習活動、学校行事、また部活動など、いずれの面でも魅力あるものをつくり上げていかなければならないと思っている。各学校に設置された開設準備室との連携をより一層密にしながら開設準備を進めていきたいと考えている。
- ・各委員からの発言にもあったが、移行期の再編対象校は、年次進行で在校生が減っていくことになるので、生徒たちが引き続き学習活動等において、活気ある活動が行えるように、できる限りの配慮を考えている。
- ・今年度の当初予算では、知事に十分に配慮していただいたが、来年度以降、再来年度も含めた移行期間においても、予算面での配慮・充実をお願いしたい。

(石井知事)

- ・高校再編に係る学習活動や学校行事、部活動に関することについては、高校再編は県立学校における教育の充実のために実施することから、町野委員から発言があったように、新高校における教育の充実をまず掲げ、新高校の開設準備を進めていく上での大切な観点として、再編統合の対象となる学校の歴史や伝統を踏まえること、また生徒や保護者、地域のニーズ等を踏まえること、そして新高校が生徒の将来の可能性を広げる学校となることが大切である。これは私も同感である。
- ・鳥海委員のご意見のとおり、新高校における学習活動や部活動を充実するために必要となる教育環境の整備、施設整備、教育備品、教員配置等が重要になるというのも、ごもっともだと思う。
- ・今年度当初予算においても、教育長からもご紹介いただいたが、必要

な措置はさせていただいたかと思う。今後も心掛けていきたいと思うが、具体的に言うと、泊高校と入善高校による新高校では、農業科のバイオ機器の更新、第2体育館の改修などを、水橋高校と富山北部高校による新高校では、くすり・バイオ科の実習施設の新増設などを、高岡西高校と高岡高校による新高校については、第1体育館の屋根の改修を、それから南砺福光高校と南砺福野高校による新高校では食品加工室や入浴実習室、ライフル射撃部の練習場を一体的に整備する実習棟の設計、国際科のタブレット端末の整備などを行うことにしている。

- 部活動についても、新高校開設から2年間は合同練習などを行うことも踏まえ、泊高校ではアーチェリーの練習場整備を、水橋高校ではフェンシングの審判器とカヌーの更新、それから、新高校との移動用のバスの購入を、南砺福光高校ではビームライフル銃の更新を行い、さらに部活動が新しい高校に円滑に引き継がれ、生徒が充実した環境で活動を続けられるように、配慮している。
- それから村上委員のお話のとおり、令和2年度、3年度の移行期には、特に再編対象校では、年次進行で在校生が減っていくことになることから、全ての生徒が卒業するまでの間、充実した学習活動が展開されるように教員配置等への配慮が必要であるということも、そのとおりにかと思う。文部科学省にも加配などで配慮してもらうように、働き掛けたいと思う。また、学校行事などについてもこれまでと同様に、充実した高校生活が送れるように優先的、重点的に一層の充実強化に取り組みたいと思う。そのためにもこの4校については、昨年度から次期学習指導要領などの高校教育の変革に対応できる授業改善拠点校に指定するとともに、タブレット端末を活用した授業を行うICT教育の実施校としている。それから、昨年度から4年連続して、魅力と活力ある学校づくりということで、学校の行事の魅力化などを特別に支援することになっている。それから、生徒用トイレの洋式化を最優先にして進め、また、スクールカウンセラーとか、スクールソーシャルワーカーの配置も大幅に拡充している。
- また、前期の再編では再編統合対象校に教員の追加配置をしていることも踏まえ、今回の再編の場合もしっかりと対応したいとこれまでも申し上げている。
- また、中学生の皆さんが適切な進路選択をし、その上で新高校への進学を積極的に選んでもらえるよう、中学校への説明や情報提供、これは藤重委員からもお話があったので、教育委員会でしっかりと取り組んでいただきたい。
- 各委員がおっしゃったように、一つ目の共通課題の高校再編に係る学習活動や学校行事、部活動等に関することについては、資料5-1の「新高校4校の開設準備に係る基本的な考え方」にしっかりと過不足

なく含まれているように思う。そこで、高校再編に係る学習活動や学校行事、部活動に関することについては、教育委員会に資料5-1の「基本的な考え方」に示されたとおりに進めてもらいたいと思うが、どうか。

(各委員)

- ・異議なし。

(石井知事)

- ・それでは、「基本的な考え方」に沿って、準備をしっかりと進めていただきたい。
- ・続いて二つ目の共通課題の新高校の名称、校歌、校章等に関するについて、ご意見を頂きたい。

(山崎委員)

- ・新高校の名称は、今回の再編統合による新高校だけのことをそれぞれに考えて検討するのではなく、現在設置されている県立高校38校全体の校名を踏まえて、検討する必要があると思う。本県における全日制の県立高校の名称については、先ほども説明があったが、中央農業高校1校を除く37校で、学校の所在地の現在の市や町の名称、あるいは過去における市や町の名称など、地域名が用いられているという説明があった。校名の付け方については、やはり学校がどこにあるのかがわかる校名にするのが自然な考え方であると思う。新高校についても学校が所在する地域がどこかわかるようにすべきであり、そうすれば新高校の名称への親しみやすさ、わかりやすさにもつながるのではないかと思う。

(鳥海委員)

- ・今ほどの山崎委員のご意見に追加させていただくが、1市に複数の県立高校がある場合は、例えば平成の市町村合併以前から市内に複数の普通科系高校がある富山、高岡両市の県立高校では、学校所在地の市名の後に、東西南北の位置を加えて学校を区別しているケースも見受けられている。先ほど事務局から説明があったように、これらの高校の校名決定、あるいは校名改称は、過去の他校や自校と区別するためなどであるので、こうした名称の変遷を踏まえる必要もあると思う。

(村上委員)

- ・一つの市に複数の県立高校がある場合の対応は、大きく二つあると思う。一つは今ほど鳥海委員のご意見されたとおりでと思う。もう一つは、前期再編時の「基本的な考え方」で示されているように、学校所

在地の市町名に旧町名を付け加えるというもので、市町村合併が比較的新しい市ではその市内での東西南北の位置よりも、旧町名の方がなじみ深い、またわかりやすいと思われる。親しみやすさもあると思われる。状況に応じて、どちらかを選択できるようにすればいいのではないかと思う。また、新高校の校歌、校章、制服などについては、メモリアルの整備と伝統の継承も踏まえて総合的に考えていくことが必要だと思う。

(藤重委員)

- ・今ほど村上委員からも発言があったが、新高校の制服は、中学生の関心が非常に高いと思うので、高校生らしさに基準を置きながら、時代に即したものになるように、必要に応じて検討していただきたい。

(伍嶋教育長)

- ・今ほどお話のあった校歌、校章、制服等については、再編対象校の両校の校長が室長、副室長を務める開設準備室において、学校関係者の意見も参考にしながら検討いただいている。場合によっては、生徒の意向もアンケートを取るとか、そういう形で実際に意見を聞いているところもある。県教育委員会としては、必要があれば相談にも乗りながら、検討が円滑に進むよう支援をしてみたい。

(石井知事)

- ・新高校の名称についての皆さんのご意見は、資料5-1の「基本的な考え方」に合致するものであり、私も皆さんと同じように考えている。また、校章、校歌等については、今後、メモリアルの整備等も含め、再編対象の両校の関係者のいろいろな思いを伺って総合的に検討して理解を頂いて、進めてもらいたい。
- ・二つ目の共通課題、新高校の名称、校歌、校章等に関することについては、皆さんのご意見は、私も含めて「基本的な考え方」に尽くされていると思うので、この「基本的な考え方」を踏まえ、新高校4校の校名について、具体的に検討することにしたいと思うが、どうか。

(各委員)

- ・異議なし。

(石井知事)

- ・それでは、令和2年4月に開校する新高校4校の校名については、この9月の定例会で条例改正を経て正式決定する必要があるので、今日はこの新高校4校の校名案を具体的に協議し、取りまとめたいと思う。
- ・事務局で作成した、県議会に提出する予定の富山県立高等学校等設置

条例一部改正議案における新高校の名称についての案を、皆さんに配付していただきたい。

- ・それでは、事務局から新高校4校の名称（案）について説明を願う。

本江 参事・県立学校課長より、配布資料に基づき、「富山県立高等学校等設置条例一部改正議案における新高校4校の名称について（案）」を説明した。

（石井知事）

- ・それでは、新高校4校の校名について検討したいと思うが、大事なことであるので、新高校ごとに協議を行いたい。まず、泊高校と入善高校による新高校の校名案について、ご意見をお願いしたい。

（鳥海委員）

- ・この学区の再編統合は、朝日町と入善町の二つの自治体にまたがっているが、新高校は、入善高校の校舎等を活用して設置することになる。
- ・「基本的な考え方」に書かれている「学校の所在地の市町名などの地域名を用いること」を適用すると、新高校の名称は「入善高校」になるので、これでよいのではないかと思う。

（村上委員）

- ・朝日町の方や、泊高校の学校関係者の皆さんのお気持ちを考えると、ちょっと心苦しいところもあるが、全く真新しい斬新な校名や、入善の下に抽象的な言葉を加えて「入善何々高校」というような校名は、これまでの本県の県立高校の校名の特徴から見ても適切ではないと思う。「基本的な考え方」からすると、町に一つの高校であることから、入善に地名を加えるというのもふさわしくないと思う。これから高校生活を送る子どもたちのことを考え、事務局案のとおり、学校所在地の町名を用いた「入善高校」がわかりやすく適切だと思う。

（山崎委員）

- ・「基本的な考え方」に記載されているとおり、本県の県立高校の名称の特徴などを踏まえ、「所在する地域がわかること」、「親しみやすく、わかりやすいこと」を尊重して検討した結果、新高校の名称は一方の再編対象校の名称、ここでは「入善高校」でよいと思う。

（石井知事）

- ・皆さんのご意見は、「基本的な考え方」を踏まえて検討すると、泊高校と入善高校による新高校の名称は、「入善高校」とするのが妥当というものであったが、私もそのように考える。それでは、泊高校と入善高

校による新高校の校名案は、「入善高校」としてよろしいか。

(各委員)

- ・異議なし。

(石井知事)

- ・それでは、泊高校と入善高校による新高校の校名案を「入善高校」とする。
- ・次に、水橋高校と富山北部高校による新高校の校名案について、ご意見をお願いしたい。

(町野委員)

- ・「基本的な考え方」の中に、「学校所在地の市町名などの地域名を用いること」とあるが、富山市には多くの県立高校があるので、その次にある「1市に複数の県立高校がある場合は、学校所在地の市町名に位置や旧町名を加えることなどを含め、所在する地域を示し、わかりやすいようにすること」が重要と思っている。校名が富山北部高校となったときには、学校の所在地が既に富山市であったことから、富山に旧町名の東岩瀬とかを加えるのはふさわしくないと思う。やはり、この場合は、新高校が設置される富山北部高校のように市名と位置でもって表すのが自然ではないかと思う。

(伍嶋教育長)

- ・私の方からは若干、補足説明をさせていただく。
- ・先ほど事務局が説明したように、学校所在地の市名の後に東西南北等の位置を加えた校名については、これまでの校名の変遷を見ると、過去の他校や自校と区別するためとの理由によって、校名が決められているという状況である。
- ・水橋高校と富山北部高校による新しい高校の校名については、「富山北部」の他に方向のエリアを示す表記としては、例えば「富山北」とすることも考えられるが、先ほど事務局から説明があったように、他の部を付けない高校のように過去に存在した高校と、あえて区別する必要はないこと、また、高校の所在地に変更もないことから、混同を避ける意味でも親しみやすさ、わかりやすさの観点からも「富山北部」とすることが適当ではないか考える。

(鳥海委員)

- ・「基本的考え方」の「親しみやすく、わかりやすいこと」という観点で考えると、昭和20年代から親しまれている「富山北部高校」とした方が多くの方々にとってしっくりくると思うので、事務局案が妥当では

ないかと思う。

(石井知事)

- ・委員の皆さんのご意見は、「基本的な考え方」を踏まえて検討すると、新高校の名称は「富山北部高校」とするのが妥当だということであったが、私もそのように考える。それでは、水橋高校と富山北部高校による新高校名称については、「富山北部高校」としてよろしいか。

(各委員)

- ・異議なし。

(石井知事)

- ・それでは、そのように決定させていただき「富山北部高校」とする。
- ・次に高岡西高校と高岡高校による新高校の校名案について、ご意見をお願いしたい。

(町野委員)

- ・「基本的な考え方」には、「1市に複数の県立高校がある場合は、学校の所在地の市町名に旧町名を加えることなどを含め、所在する地域を示して、わかりやすいようにすること」とある。
- ・市町名に位置や旧町名を加えるのは、所在地をよりわかりやすくするためのものであると思われる。
- ・一方、例えば富山高校のように位置や旧町名を加えないで、単に所在市名だけを冠する高校もあることから、そういう高校もあってもいいのではないかと思う。

(藤重委員)

- ・現在の高岡高校は、学校所在地の市名のみを用いた校名だが、高岡市内にある他の高校と区別することができることから、あえて別の校名にする必要はないと思う。

(山崎委員)

- ・この高岡高校については、名称の変遷を見ると高岡尋常中学校、高岡中学校などを経て現在の高岡高校となっているわけだが、旧高岡市内の普通科系高校の中では最も古い高校であって、創立当時から市名に位置を付けない学校名で親しまれている。そしてまた、その所在地も多くの方々に知られているところであり、新高校の名称については「親しみやすく、わかりやすいこと」を重視すれば、「高岡高校」とするのが適当ではないかと思う。

(石井知事)

- ・委員の皆さんのご意見は、「基本的な考え方」を踏まえて検討すると、新高校の名称は「高岡高校」とするのが妥当ではないかということであったが、私もそのように思う。それでは高岡西高校と高岡高校による新高校の校名案については「高岡高校」ということでよろしいか。

(各委員)

- ・異議なし。

(石井知事)

- ・それでは、そのように決定させていただき「高岡高校」とする。
- ・次に南砺福光高校と南砺福野高校による新高校の校名案について、ご意見をいただきたい。

(村上委員)

- ・南砺市には複数の県立高校があるので、「基本的な考え方」としては、「1市に複数の県立高校がある場合は、学校所在地の市町名に位置や旧町名を加えることなどを含め、所在する地域を示し、わかりやすいようにすること」を適用することになると思う。
- ・南砺市は8町村という多くの自治体が合併してできた市で、何よりも学校の所在する地域がわかる校名とするのが良いと思う。具体的に言うと、南砺市内での東西南北という位置よりも、むしろ地名に校舎のある旧町名の福野を加えて、事務局案のとおり「南砺福野高校」とするのがわかりやすいと思う。

(町野委員)

- ・いろいろな意見があると思うが、校名を市の名前の南砺高校としても、南砺平高校との区別は付くが、南砺福野高校は平成22年の前期再編で誕生した新高校である。南砺総合高校井波高校との再編統合で南砺福野高校となった経緯を踏まえると、今回、再び新高校になるに当たっても「基本的な考え方」に従うと、校名を「南砺福野高校」とするのが妥当だろうと考える。

(山崎委員)

- ・今後、南砺市における県立高校は、現在の南砺福光高校と南砺福野高校による新高校と、南砺平高校の合せて2校が存続することになる。南砺平高校については南砺福野高校の分校であるが、それぞれに校長を置いており、それぞれ独立した学校としての運営が行われている。言ってみれば、実質的には別な学校として取り扱われている。こうしたことから「基本的な考え方」を踏まえて、親しみやすさ、わかりや

すさの観点から2校の名称については、「南砺福野高校」と「南砺平高校」にするのが適切であると思う。

(石井知事)

- ・委員の皆さんのご意見は「基本的な考え方」を踏まえて検討すると、新高校の名称は「南砺福野高校」とするのが妥当だということだったが、私もそのように思う。それでは南砺福光高校と南砺福野高校による新高校の校名案は「南砺福野高校」ということでよろしいか。

(各委員)

- ・異議なし。

(石井知事)

- ・これまでの検討をまとめると、事務局案のとおり新高校の校名案は、検討順に「入善高校」、「富山北部高校」、「高岡高校」、「南砺福野高校」に決定したので、資料の題名の(案)を削除し、これを成案ということにする。
- ・今後は県議会9月定例会に富山県立高校等設置条例の一部改正を提案し、県議会の議決を頂いて、新高校4校の校名が正式に決定する運びとなる。
- ・続いて、協議事項(2)の幼児教育の充実強化についてお諮りをしたいと思う。事務局から配付資料について説明を願う。

近藤 小中学校課長より、資料6及び参考資料10に基づき、「幼児教育の充実について」について、説明した。

(石井知事)

- ・事務局から説明のあった「幼児教育の充実について」委員の方々のご意見を伺いたい。

(藤重委員)

- ・幼児教育に関わる三つの要領などが、平成29年3月に改訂されて、3歳以上についていずれも幼児教育を行う施設として位置付けられ、共通で同等の教育を行うことができることとなったということについては、非常に良いことだと思う。
- ・多くの研究から幼児期に質の高い幼児教育を受けることの重要性が明らかにされて、県内においても幼児教育の質のさらなる向上を目指し、訪問研修を行っているということは大変、大切なことであると思う。
- ・課題にも書かれているが、保育士の方々が大変忙しいと聞いているので、研修のあり方を工夫していく必要があるのではないかと考える。

(鳥海委員)

- ・説明いただいた資料の中では、非認知能力の重要性というものが非常に大きく取り上げられているが、この資料の一番最初のところの幼児教育の重要性などを見ると、幼児教育における運動も重要であると述べられている。人の発育・発達の様子を示す図を参考にしてみると、幼児期は神経機能の発達が著しくて、大体、5歳ぐらいまでに大人の約8割の能力にまで発達することが示されている。そのため、タイミングよく動いたり、力の加減をコントロールしたりするというような運動を調整する能力というものが、顕著に向上するという時期になる。運動を調整する能力は、新しい動きを身に付けるときに重要な働きをする能力であり、幼児期にさまざまな運動、動作を経験させて運動を調整する能力を高めておくことは、児童期以降の運動、発達の基盤を形成する上でも重要な意味がある。幼児教育は小学校以降の学習の土台という言葉もあるが、まさにそのとおりで、土台となる教育の充実にしっかりと取り組んでいただきたいと思う。

(村上委員)

- ・家庭における親子の関わりのあり方もとても重要である。乳幼児期に親と子どもの関わりが温かくて、子どもの情動とか、その原因について親が多く話し掛けているほど、自分や他者の情動の認知力や表現力が高いと言われているので、0～2歳の関わり方はとても重要である。
- ・最後の親学び講座であるが、特に今年度から新たに0～2歳児を対象にするなど、乳児の保護者にも拡大されたことは大変いいことではないかと思う。
- ・幼児教育と小学校教育の接続だが、さらに連携を深めることが必要である。年長さんは、かなり幼児教育施設でリーダーシップを取っているが、小学校に入った途端に一番小さな学年となり、逆に過保護になってしまう。そういう扱われ方をするということもある。この幼小の接続を円滑につなぐことが大事であると思う。
- ・さらに最近増えている発達障害のお子さんたちについては、幼児教育施設でどのように対応されていたか、どういう工夫をされていたかを適切に詳細にお伝えしていくことが大切かと思う。

(山崎委員)

- ・お茶の水女子大学が実施した調査研究によると、非認知能力と子どもの学力との間には相関が見られたということが報告されている。
- ・また、アメリカのペリー就学前プロジェクトにおける非認知能力に関する実験では、非認知能力に重点を置いた教育を幼児期、3～4歳児に行ったところ、その後の経過として非常に効果があったという報告

がなされている。

- このように学習意欲向上にもつながるとされる非認知能力の育成については、実はこれまでも幼児教育において意図的に行われていた場合もあったかと思うが、これを全ての子どもの幼児期の教育において、意識して意図的に非認知能力に重点を置いた教育の取り組みを進めていくことは大変重要だと思う。
- また、その際、指導についての考え方の転換とか、指導方法についての改善というものを考えていかなければならないという課題もあるが、大変重要であると思う。

(町野委員)

- これが議題に挙がり、いよいよ来たかという感じである。
- 世界的にこの幼児教育が、先進国で進められていく流れの中に一つあると思うが、過去、教育委員会の中でも幼児教育について何回か話したことがあるが、文科省と厚労省と二つの管轄の中でやっている関係で、なかなか情報交換とか、そういうことがやりにくかったということで、今回、幼児教育センターを県の中でつくられるということは、これは非常に画期的なことだと考える。
- そういう中で、非認知能力というところに焦点を当てているのは非常にいいし、そういうものを子どもたちに対して、いろいろなチャンスを与えて伸ばしていく。そういうことを意識しながら、やっていくことが非常にいいのではないかと思う。
- 先ほどお話があったように、300 何カ所の保育園、幼稚園があって、その職員の方にどうアクセスしていくかについては、非常に重要だと思うので、やり方をいろいろ考えながら、ぜひ、全体に広めていただければと思う。
- 今までできなかったのだからあまり慌てなくてもいいと思うので、10年ぐらいかけてきちんとしたもの仕上げていくつもりで、やっていけばいいものになるのではないかと思う。

(伍嶋教育長)

- 幼児教育には決められた教材はないので、やはり身近にある環境、例えば人とか物とか事とか、そういうことへの出会いを通してそれらに積極的に関わることによって、意味のある経験がなされるのだと言われていて。それだけに今後、幼児教育を進めるに当たっては、教職員、また保育士の方などの子どもへの関わり方が非常に大事になってくると考えている。
- 例を挙げると、例えばサツマイモ掘りをした場合には、これは大抵の子どもさんは泥や虫などにすごく抵抗を感じて嫌がるということもよく聞くが、例えば周りの他の幼児が楽しそうに芋掘りをしているとこ

ろを見る、あるいは、保育士さん等の教職員の方が、一緒になって芋掘りをするという楽しげな様子を見せることにより、抵抗感のあった子どもも自ら芋掘りをするとか、そういうことになるということを聞いている。そういう意味では、教職員なり保育士さんの方の関わり方が非常に大事だと思っている。今年の前半、先ほどもご紹介があったが、各幼稚園等に対して訪問研修をいろいろやっているが、その中でこうした教職員の皆さんに対するいろいろなアドバイスを通じて、関わり合い方などのスキルを磨いていただくように支援をしてもらいたいと思っている。

- また、先ほど紹介のあったフォーラムを秋に開催することになっているので、このフォーラムにおいても非認知能力というものをしっかりと研修をしていただくとともに、できれば県民の皆様にも参加していただければと思う。

(石井知事)

- 昨年、人生 100 年時代ひとづくり構想会議を開催し、この新春に提言をもらった。
- いろいろ有益なご提言を頂いたが、私が一番やはりそうだったかと思って非常に心強く思っているのは、非認知能力を高めることが重要であることである。
- 特に日本の高校生の意識調査について、アメリカや中国や韓国などと比較した研究があるが、日本の高校生はすごく自己肯定感が低い。かつてに比べると、チャレンジ精神も足りなくなっている。そういう次の時代を担う青少年、子どもたちの意欲を、どう高めたらいいいのかということを以前からずっと考えていたが、ひとづくり構想会議でまさにそういうことも含めた非認知能力を高めるために、やはり幼児教育が大事だという話があった。
- それから、今日の事務局からの説明にもあったように、非認知能力というのは、小さな頃からいろいろ工夫していろいろな場や機会を設けることで、ちゃんと育成することができるのであって、持って生まれた性格や気質の問題ではないということが、だいぶ明らかになっている。町野さんや皆さんがおっしゃったような今度の幼児教育センターは、私は非常に大事だと思っている。まさに三つ子の魂百までと言うが、やはり幼少の頃が大変大事だと思う。
- そこで先ほども報告があった幼児教育センターに配置した幼児教育スーパーバイザーとか、アドバイザーの皆さんを幼児教育施設に派遣して、訪問研修をこれまで8回やってもらったが、事務局の報告によると研修体制の充実につながるとか、訪問研修によって内部、外部から評価されて自信に結び付くという前向きな声もあったので、大変心強いと感じた。

- ・また、村上委員さんからもご発言があったが、幼児期の学びを小学校教育に接続させることも大切で、せっかく保育園にいたころは年長さんでそれなりにリーダーシップを取っていたのに、小学校に入ったら何となく過保護になっているのも、そうだと思うので、幼児教育と小学校教育のつなぎをうまくやっていないといけない。そのために、なるべく具体的な事例を示すといった、しっかりしたものをつくっていただければと思っている。
- ・この10月に「非認知能力の育成」をテーマにしたフォーラムが開催されるということだが、ぜひ、幼児教育施設とか小学校などの関係者の方はもちろんのこと、できるだけ多くの県民の皆さんに関心を持っていただいて参加していただくように、これはせっかくやるのだから教育委員会の方でもPRに努めていただきたいと思います。
- ・今日は教育委員の皆様から、大変多くの貴重なご意見を頂いた。ぜひ、教育委員会の皆さんは、今日の議論を踏まえて、幼児教育の充実にしっかり取り組んでいただきたいと思います。

4 閉会

(石井知事) それでは以上をもって、今日の会議は終了とする。